

## 通俗の説

近代文芸は、エリートのみである。いくらか一般の人間を見下し、輕蔑する。無知な人間は相手にしないで、通人の約束ごとによっている。かいなどの初心者などにわかつてたまるかう自負がある。

通俗といふことを何よりも怖れる。反俗こそ芸術であるとされる。

そういうヨーロッパの近代芸術に学んだ明治以降の文化がほかの方面に思い及ばなかったとしても致しかたもあるまい。伝統を棄て、外来に就くことが高尚であり、価値のあることだと信じた。われわれの文芸はすいぶん窮屈なところへ自らを封じ込めたものである。そして、それに氣付いている人がすくないというのも不思議である。

たとえばことばの問題。

言文一致ということになってすでに百年になろうとしている。これが名のみのものであること

は人のひとしく、ひそかに認めるところであるが、それとは別に、文語と口語の差がはっきりしている。

俳句は文語によることになっている。なぜか、と反問する野暮天もない。口語に比べて文語の方が何となく、すぐれているように感じる向きがすくなくない。

おかげで、日常のことばのリズムは俳句には反映しにくくなっている。これは俳句だけでなく、詩歌一般に言えることである。口語では洗練された感情、情緒の表現にたえないかのように思われる。

俗をすて雅を求め、文語の中から雅語の体系をつくり上げる。これは短詩型文学に共通する点で、俳句を作るのは、その雅語のシステムをまがりなりにもわがものにするにほかならない。もちろん、普遍的雅語などというものが容易に習得できるわけがないから、めいめいの属するグループの方言ともいふべき雅語に習熟することを心掛ける。

その過程で、しらずしらずのうちに、現実から遊離した言語の世界へ入って行くけれども、むしろ芸術的進境だとされる。こうして詩語は確立する。

これまで俳句の革新がいろいろあったけれども、いつも反俗の方向をとっていた。かつて反俗の危険を冒したことはなかったのではあるまいか。同じ詩語の世界の中の革新であった。

芭蕉は、それまで和歌の守ってきた雅語の柵をとり外すことによって短詩型文学に新しい生命

の泉を発見することができた。通俗を通じての風雅である。

俗語の詩化。そこで創造の火花が散る。手あかのついた常套的雅語では精神の根源をゆさぶるのは困難である。

いまの俳句が人間を見つめていないと言うのではないが、雅語、文語という眼鏡越しでは低俗な、どろどろしたところが視野に入ってこないうらみがありはしまいか。

短詩型文学が小さな個性にこだわるのは賢明ではない。俳句はもつと民芸的、ことばに即して言うならば、諷刺であつてさしつかえない。

だいたい、個性を主張するなどというのは個性がしっかりしていないものの喜ぶところである。そういう小さな個性に興味をもつ人は限られている。本当の個性はむしろ、通俗の中におのが身を隠すはずである。それでなお、泥土の中から蓮が花を開くようにあらわれるものがあれば、それこそ個性の名にふさわしい。

とは言うものの、通俗論の泣きどころは、めいめいの口語の腰がすわっていないことである。山家育ちが都へ出てきて、心もとなない借りもののことの葉を操る。これがわが口語かと情ない思ひをしている人間にとって、通じたくとも俗の世界は達しにくいかもしれないのである。

## 去私

「イギリス人やアメリカ人は個人主義、いつもオレが、オレがと肩をいからしている。見よ、英語の第一人称のI（アイ）は、文中、どこにあつても大文字でふんぞり返っている」

そんなことを言う人があつた。戦争の始まる前から、戦中にかけてのことである。軍人が言い出したらしい。かなりもののわかりそうな人たちまで、なるほど、という顔をしてそれを聞き、ついで、受け売りにした。

英語の「私」が大文字になっているのは、別に威張っているのではない。一字だけで一語をなすものは、小文字にすると見にくい。前後の語とくっつくおそれもある。いつの間にか大文字にするのが慣例となつた。ほかにも感嘆詞のO！（オオ、というのは日本語と同じ）もやはり、文中でも大文字にする。

Iの大文字を個人主義に結びつけたのは、無知のために生まれた偏見だったが、この話が広ま